

資本論 第一巻 資本の生産過程

第四編 相対的剰余価値の生産

第十三章 機械装置と大工業

第八節 大工業による工場手工業、手工業、家内労働の革命

1. 【労働大学刊 「資本論 解説」より】

- ・機械は、家内労働も変革する。
- ・労働力の搾取は工場や近代的工場手工業におけるものよりも、さらにはなほだしい。
- ・というのは、家内労働にあつては、本来の雇主と労働者との間に多くの寄生者が介在しているからであり、また労働者が分散しているため、雇主にたいする抵抗力が弱められているからである。
- ・また、家内労働は、大工場と農業から駆逐されて過剰人口となった人々の最後の避難所となっているので、そこでは労働者間の競争が最高度に達している。
- ・家内労働者は貧困のため、照明、換気の設備も設けることができず、就業も不規則で労働条件は過酷をきわめていた。
- ・その結果は、例えば、イギリスの近代的家内労働の代表であるレース工業において、レース女工の肺癆病（はいりびょう）率が1852年の45人に1人の割合から、1861年の8人に1人に急増したことにも現われている。

2. 【あらすじとイラストでわかる資本論 文庫銀河堂 より】

- *資本主義は、初めは多くの人が集められる協業の形をとった。
- ・次に分業に基づく工場手工業へと発展する。
- ・やがて機械が導入されると、先の2つの体制を破壊する。
- ・ある針製造業では10人の労働者が分業によって1日4万8000本の針を製造していた。
- ・そこに機械が導入されると、少女1人が監視について4台の機械を動かし、1日約60万本製造されるようになったという。
- *ここで犠牲になった労働者たちは、新たに興（おこ）る産業へと流れていく。
- ・しかし技術が進歩し、機械の性能が高くなればなるほど、その使用に必要な労働者は、以前ほど多くなくてもよくなる。
- ・そして実際、新たに雇い入れる労働者は以前よりは少なくなる。
- *大工業による協業と工場手工業の破壊の影響は、工場内の労働者だけにとどまらない。
- ・一般の労働者よりも一段下と見られている婦人労働者や児童や非熟練工などにも及ぶ。
- ・また工場の周辺にある家内工業もまぬがれない。
- ・以前は独立してもろもろの商品を生産していた家内工業は、いまや単に大工場の下請けがすべてとなる。
- *資本による家内労働の搾取は、工場労働者以上の過酷さを呈（てい）する。
- ・なぜなら家内労働の事務所はそれぞれ独立して、資本からみずからを守る組織を形成しえないからである。
- ・また家内労働の各事務所同士が生き残りのために相手を蹴落とす熾烈な競争をしているからだ。
- ・婦人や児童の過酷な労働は、子供への教育を破壊する。
- ・また、彼らの家庭は崩壊する。
- *労働者がクビを切られやすくなったのは、機械の導入で女性や子供でも同じ環境で働けるようになったからだ。
- ・女性や子供は成人男性労働者よりも従順で安く使える。
- ・しかも仕事の効率が同じなら、資本は誰だってそちらを使いたい。
- ・マルクスはここでミシンの例を出す。
- ・服飾業も今までは男性がやっていたのだが、ミシンという機械が出てきてからは、女性が主流になってしまった。
- ・子供は教育と称して、労働に組み込まれていった。

・ こうして機械と大工業はさまざまところで変革を起こしていく。

3. 【面白いほどよくわかるマルクスの資本論 日本文芸社 より】

※機械が登場したことで工場手工業が追いやられたが、すべての部門が同じように変化したのではない。

※資本が工場手工業や家内労働を自分の支配下において再編成することもあり、この資本の支配下に置かれたものを「近代的工場手工業」「近代的家内労働」と呼び、大工業の制覇の過程で生まれる「過渡的諸形態」としているが、ここでは残虐な搾取が行なわれた。

※「安くて未成熟な諸労働力の搾取は、近代的工場手工業では本来の工場におけるよりもいっそう恥知らずとなる」と、マルクスは表現している。

※しかし、労働コストを引き下げることの方法にも限度があり、やがて大工業に急速に転化する。

※服飾産業を例にする。と、ミシンの導入で男性労働者が駆逐され、女工が取って代わった。

※また、ミシン所有者が仕事をしていたが、ミシンが安くなって、大規模なミシン所有者が出現し、工場手工業や家内労働が主だった服飾産業は、工場経営へと切り替わっていったのだった。

※この急速な転化は、工場法の適用範囲を工場手工業や家内工業にまで拡大したことが要因だった。

転化の流れ

■機械導入による大工業の登場



■多くの工場手工業や手工業、家内労働が大工業に追いやられるが、そのまま残ったものもあった



■資本がこれらの工場手工業や家内労働を自分の支配下において再編成



■「近代的工場手工業」「近代的家内労働」と呼ばれた



■資本による残虐な搾取が行なわれる



■労働コストを引き下げることにも限度があり、やがて大工業に急速に転化

4. 【ネット検索したもの】

a 手工業と分業とに基づく協業の廃棄

機械が、単純協業や工場手工業を「廃棄」することが語られています。

といっても、それは一直線ではなく、機械（工場）経営になるまでには様々な過渡的形態、中間形態があったことが紹介されています。

マルクスは「単一の作業機が協業や工場手工業に代わって現われるかぎりでは、この作業機そのものがまた手工業的経営の基礎になることができる」と述べています。

報告者は、機械の導入といっても単一の作業機であり、動力はまだ人間の力に依存しているし、まだ人間主体の手工業の労働編成はくつがえされてはいない、と説明しました。

b 工場手工業と家内労働とへの工場制度の反作用

本項では、工場経営が資本主義的生産様式の支配的形態になると機械経営の原理や労働編成が工場手工業や家内労働などにも作用し、これらの経営が変質してしまうこと、さらには、そこでは労働力の搾取が本来の工場に比べもっと露骨になることが述べられています。「家内工業は今では工場やマニュファクチュアや問屋の外業部に変わっている」とありますが、これはもはや家内工業が大工業を頂点とする体制とは無縁では存在しえなくなったことを意味します。

c 近代的工場手工業

bの原則が工場手工業や家内工業においてどのように貫かれるのか、その実例が示されます。

cでは各種工場手工業の実態、特に過酷な労働の実態が暴露されます。

印刷工場手工業は「屠殺場」と呼ばれたと紹介されていますが、どうしてそんなにひどかったのか。

印刷用油性インクや活字に有害物質が含まれ、しかも狭い空間の作業場で過度労働が強いられたからではないか。

産業革命期にはすでに新聞印刷用の輪転印刷機が実用化されていて、1時間に2万枚の能力があった。

d 近代的家内労働

ここではイギリスのレース製造業と麦わら細工業に焦点が当てられています。

これらは大工場から原材料や半製品が供給され、最後の仕上げを担っていました。

子供を働かせる作業場は「レース学校」とか「麦わら細工学校」とか呼ばれていましたが、実際には教育が施されていませんでした。

装飾的な製造品と劣悪な労働との著しい落差。

レース製造地帯では**現物賃金制度**が広範に行われていたとあります。

e 近代の工場手工業および家内労働の大工業への移行。

これらの経営様式にたいして、工場法を適用することによってなされるこの革命の促進

ここでは、近代の工場手工業、近代的家内労働の大工業への移行が**工場法**の適用によって人為的に促進されたことが、「衣料品」の生産部門を舞台に考察されています。

というのは当時この部門は工場手工業や広範な家内工業から成っており、低い賃金の下で多くの労働者が働かされていたからです。

そこにマシンが導入されるのですが、そうするとマシンは革命的に作用し、ここでも雑多な過渡的形態が混じり込みながら工場経営への移行が進みます。

そしてこの上に工場法が適用されるとその傾向(工場経営への移行)が一気に推し進められます。

工場法による規制ですが、これは「労働日の長さ、中休み、始業・終業時刻に関する労働日の強制的規制や児童の交替制度や一定の年齢に達しないいっさいの児童の使用禁止」といった内容です。

資本家たちは、生産には避けられない「自然的障害」というものがあり、そんな規制が加えられると生産そのものが成り立たなくなってしまふ、との非難の叫びを上げました。

しかし実際には機械の導入や改良によって「自然的障害」は克服されていきました(この規制に対応できない手工業者は駆逐されました)。

とはいえ、マルクスは、資本家は労働条件の改善を自ら進んで行うことはない、と労働者の闘いの必要性を強調しています。

5. 【的場昭弘著 超訳『資本論』より】

五つに分けられた段階(①協業の廃棄、②工場制度の家内労働と工場手工業への反作用、③近代の工場手工業、④近代的家内工業、⑤近代の工場手工業及び家内労働の大工業への移行)の中でとりわけ重要なのは、やはり5番目の「近代の工場手工業及び家内労働の大工業への移行」でしょう。

『女性や未熟練労働力を乱用したり、あらゆる標準的な労働・生活条件を強奪したり、過度労働と夜間労働によって労働力を著しく低廉化させることによって、最後には、もはやこれ以上乗り越えられない自然の限界に衝突する。』

されと同じ基礎に基づく商品の低廉化と資本主義的搾取一般も、この限界に衝突する。』

こうした点に到達すれば、それまでは長くかかったのだが、工場手工業への機械導入の時が始まり、点在していた家内工業(そして工場手工業も)急速に工場経営へ転化させる。』

こうした分野として服飾産業をあげます。

革命をもたらしたのはマシンだと――。

マシンの導入によって男性労働者が駆逐され、女工がそれにとって代わったのでした。

最初は小マシン所有者が仕事をしていましたが、マシンの低廉化で大規模なマシン所有者がこれらを駆逐します。

こうして小規模の工場手工業、家内工業がおもだった分野で工場経営が進んだのです。

6. 【マルクス資本論 佐々木隆二著 角川選書】

※資本主義的生産様式は、旧来の生産様式をたんに解体するのではなく、それが利用できるものであるかぎり、みずからのシステムのなかに組み込み、徹底的に利用する。

※ここでも、独自の資本主義的生産様式としての大工業が、工場手工業や家内労働を組み込み、苛烈(かれつ)な搾取を行うことが指摘されている。

※とりわけ家内労働は生産力が低く、「安価な労働力の無制限の搾取がそれらの競争力の唯一の基礎」をなしているため、「敵対的で殺人的な面をますます多くさらけ出す」。

※このような資本主義のもとでの前近代的な生産様式の徹底的な利用は、労働者たちが長年の闘争をつうじて勝ち取った工場法による労働日の規制によって、はじめて消滅することとなる。